パーソンズとモダンのリアリティ

１．遅れてきたパーソニアン

社会学者としてのアイデンティティすら喪失ぎみの“ぼく”にとって、なぜ、いまになって、タルコット・パーソンズを語ることに意味があるのだろうか。やや遅れてきたパーソニアンとして、だからこそ、そうあろうと過剰に適応したのが７０年代だった。だが、パーソニアンとしての誇りをもって８０年代の前半までをしっかりと生きてきたのに、いまパーソンズの社会学的な貢献を語ることに、ぼくはなぜある時代錯誤感をもつのだろうか。そのズレの感覚を解読することは、パーソニアンとしてのアイデンティティにつつまれて幸福だった頃の自分を再解釈することになるし、あるいはそれ以上に“パーソニアン”としていつかはやらなければならない使命なのだろう。

フォロアーは、いつも時代の状況の読みに敏感でなければならない。フォロアーは、リーダーのように自分からものごとを想像するパワーがない以上、誰に従えばよいか、という状況の読みにかんしてだけは、鋭い感覚をもたなければならない。そうしないかぎり、フォロアーは単なる弱者（無能者）として、時代の流れから追放されるだけである。有能なフォロアー（？）は、時として能力はあっても意固地で時代の要求に鈍感なゆえに置き去りにされるリーダー以上に、社会の大きな流れの生成に重要な役割をはたすはずである。もしもフォロアーの行動が、その読みによって、大きな流れを生成するきっかけとなったり、また大きな流れを動かす結果をもたらすならば、フォロアーの読みと行動は無視しえないはずである。そのような意味で、フォロアーはその社会的役割にある価値を付与されるのである。

パーソンズという偉大なリーダー（ある時は教祖のように！）のもとで、パーソニアンたちが、構造機能主義の思想と理論のセットにたいして、フォロアーとしてどのような役割をはたしたのか。それは、パーソンズの理論と時代精神との関係を解読することになるはずである。有能なパーソニアンであるためには、パーソンズの貢献と限界を、理論的な枠組ばかりでなく、時代状況との関連で直感的に理解するセンスが大切である。

パーソンズとモダンのリアリティ

２．パーソニアン・クライシス（1）

パーソンズの危機は、アメリカ社会では、少なくとも２度あった。最初は５０年代のＤ．リースマンらの新しい社会現象（豊かな大衆消費社会やマスメディア社会）にかんする研究とＣ．Ｗ．ミルズによる直接的なパーソンズ批判である。ミルズの『社会学的想像力』は、パーソンズが社会学的勢力を誇り始めた時期に真正面から批判を投じた最初のものであった。その機能主義批判は、モダンの価値をそのまま支持するパーソンズへの疑問の提示であり、「社会学者には新しい社会を構想する社会学的想像力こそが大事で、現状の社会システムを正当化するような理論は価値がない」という、構造機能主義へのイデオロギー批判であった。これは、それなりにもっともであり、社会学者には新しいヴィジョンを描く社会学的想像力が必要である、という主張も、それなりに意味のあるものではあった。しかしだからといって、このような批判は、パーソンズの野心的な試みである『社会学の総合理論をめざす』という意欲を失わせるものにはならなかった。パーソンズにとって、「それはそれ、これはこれ」であり、同時に「いまこそ近代産業社会の総合理論の体系化をしなければならないし、それができるのは自分しかいない」という自負があったはずである。パーソンズは、近代産業社会を社会システムとして解明することに歴史的な使命感を抱いていたはずである。したがって、５０年代のアメリカ社会に、大衆社会とか消費社会といった新しい社会傾向が発生し、近代産業社会の基本特性を浸食するような社会現象が生起しはじめても、パーソンズは、それらはまだマイナーな社会現象にすぎない、という認識を優先させざるをえなかったのだろう。社会構造として近代産業社会の全体像を理論化しようとするかぎり、ミルズのイデオロギー批判にもまたリースマンらの新しい社会現象の研究にも十分な配慮をする必要性を認めたくなかったのだろう。というよりも、まだまだ時代そのものがパーソンズの社会システム論を擁護していたし、その総合化を期待していたはずだ、といったらパーソンズをあまりにも擁護しすぎだろうか。

当時パーソンズは、近代産業社会のシステムにかんしてＡＧＩＬモデルを核にして、その全体像をほぼ完成させていた。経済・政治・社会・文化（核家族）といった社会モデルばかりでなく、生理（身体）・個人（パーソナリティ）・関係（相互作用）・価値（正当性）といった行為モデルにかんしても、その全体的なイメージを確定し、さらに進化論の視点から近代産業社会までの歴史的展開を完成させることで、モダンという語るべきすべてにかんして、ほぼ言い尽くしていた。学説史的には、パーソンズは、近代社会学の先導者であるウェーバー（行為論）とジンメル（関係論）とデュルケーム（制度論）の視点をすべて統合することで、近代社会学＝構造機能主義社会学を集大成していた。それが７０年代のパーソンズであった。５０年代からの２０年間で、パーソンズは、近代を語ったすべての知識遺産を、社会学ばかりでなく、フロイトなどの他のモダンの専門家＝知識人の知識をも吸収し、それらを大胆に統合することで、「近代産業社会とは何であるか」を機能主義の立場から語り、その壮大な理論体系を提示した。

このようなグランドセオリーにたいして、グールドナーが反発し、新しい社会学の可能性に挑戦するためには、まずは破壊しかない、と考えたことは、今からすれば分からないでもない。執拗なまでのパーソンズ批判には、その呪縛から解放されるには、まずは自分をも含めて機能主義の権化であるパーソンズにたいする徹底した批判しか、戦略論としてはありえなかったのであろう

しかも時代もグールドナーに味方していた。７０年代のアメリカは、すでに十分なまでに「豊かな社会」であり、その豊かさをどう表現すればよいのか、が社会的なテーマになっていた。豊かさをいかに獲得するか、という機能主義が得意とする目的論的な発想はすでに時代の潮流からズレつつあった。このような新しい流れはすでに５０年代のはじめからあった。豊かな社会におけるさまざまな社会問題、たとえば都市での孤独、レジャーの大衆化、新しい情報メディアの登場といったサブテーマが、豊かな社会との関連で、近代産業社会の構造を壊しつつあった。そのような時代の変動にたいして、あたかもそれを無視するかのようにパーソンズが７０年代になっても依然として近代産業社会の構造にこだわり、その解明にすべての精力を注ぎ、またそればかりでなく、社会学の流れをもそこに誘導していったとき、その社会学の流れと時代状況のズレに、多くのパーソニアンが敏感にならざるをえなくなったのも、当然のことであった。時代はますますモダンから距離をとっていくのに、パーソンズはそのモダンの理論化に心血を注ぐ。敏感なフォロアーほど、時代と理論のズレにある種の苛立ちを感じざるをえなかったはずである。そのズレの頂点がグールドナーの批判であった。パーソンズが「モダンとはなにか」に機能主義から統合理論を完成させたとき、それはすでに批判の対象としての宿命を背負っていたのである。グールドナーにとっても、パーソンズ批判は歴史的使命であったのだろう。もしもグールドナーがしなかったならば、きっと別のパーソニアンがその使命を引き受けたはずである。

パーソンズとモダンのリアリティ

２．パーソニアン・クライシス（2）

この第２の危機は、パーソニアンにとっては、どちらの流れにのればいいのか、その選択を迫られた点で、深刻に悩まざるをえない内的な危機であった。理論化の方向に適応してパーソニアンとして生きるか、それとも時代の流れにのってアンチ・パーソニアンとして生きるか、パーソニアンは踏み絵の前に躊躇せざるをえなかった。

しかしこのような危機は、日本社会ではまだリアリティのあるものではなかった。多くのことがアメリカの受け売りでしかない日本の社会学にとって、グールドナーの批判もひとつの知的な流行としてもてはやされたにすぎなかった。だから、その流行にのってアンチ・パーソニアンに変身しても、パーソニアンとして共有できる機能主義の多くのツールを放棄したとき、それに代替する新しい武器はまだどこにもなかった。流行がすぎたとき、かれらには何も残っていなかった。モダンのリアリティからすれば、日本社会では、第２の危機はさして問題ではなかった。７０年代の日本社会は、まだ機能主義が似合っていた。

問題は、今からである。第３の危機が今からやってくる。それは、パーソニアンばかりでなく、パーソンズの思想と理論そのものにとっても最大の危機である。いままでは、時代もまだモダンに固執していた。だからパーソンズがターゲットに選ばれたのである。批判されるのは、パーソンズにその価値があったからである。しかし今迎えようとしている危機では、パーソンズは無視されるかもしれない。パーソンズが構想し統合してきたモダンのコンセプトそのものが意味を失うかもしれない。とすれば、その危機はパーソニアンにとって致命的であろう。パーソニアンである存在理由が喪失するのだから。

その危機は「豊かな社会と情報社会がクロスする社会」のヴィジョンにある。そのヴィジョンが社会的勢力をもち社会的に合意されるならば、いままでモダンを支えてきたすべてのコンセプトはその社会学的な価値と意味を喪失してしまうはずである。これが『社会学的想像力　ver.3』として語られるべき“パーソニアン・クライシス”である。パーソンズは死んだ。しかし誰が、どのようにして殺したのか、それが問題だ。

パーソンズとモダンのリアリティ

３．パーソニアンのリアリティ（1）

パーソニアンがパーソンズから学んだモダンのリアリティとは何だったのだろうか。それを明確にしなければ、『社会学的想像力　ver.3』のヴィジョンは描けない。そこでパーソニア ンが囚われてきたモダンのリアリティを明確にしよう。

1）目的：「貧困からの離陸」の共有
モダンとは「貧困からの離陸を共有の目的とした社会」である。貧困とは経済的貧困であり、いわゆる心の貧困といった文化的で精神的な問題はここでは無視される。目的は明確であり一元的である。モダンは、それ以前の伝統社会の目的（伝統の遵守による安定した社会秩序の維持と存続）を無視し、経済的なブレイクスルーを唯一の社会目的として合意し、そのために社会システムの変革を許容した社会である。それ以前の没意識的でかつ超目的的な社会ではなく、経済的貧困からの離陸という特定化された社会目的を設定し、その実現に向かって社会構造の手段化をはかったユニークな社会、それがモダンである。
これは、個人のレベルでいえば、誰でもが金持ちになりたいと願い、そのために他のすべてを捨てて生きることがモダンにふさわしい生き方だ、ということである。貧乏な過去から金持ちに「なる」ことは、モダンの成功者であるばかりか、権力者であり、社会的威信を獲得することであり、さらには尊敬されるべき名誉であった。経済的な成功はモダンの社会における個人のライフスタイル・モデルであった。

2）価値：手段的活動主義
モダンの社会目的を正当化する価値は「手段的活動主義」である。これは「手段的価値とコンサマトリー価値」と「活動主義と静寂主義」の２軸の交差から成立した一つの価値観である。第１の価値観は、行為を正当化する基準が、行為それ自体にある（コンサマトリー価値）か、それともある目的を達成するための手段にある（手段的価値）か、という対立項からなり、モダンの目的を正当化する価値は後者である。たとえば、「歩く」ことを考えると、直線で歩く場合（買い物にいく）と曲線（散歩を楽しむ）が想定できる。なぜ、直線で歩くのだろうか。それは、ある目的（スーパーである必要なものを買う）を達成する手段としてもっとも合理的で効率的だからである。そこでは歩くこと自体は意味をもたない（つまらない）。だから可能なかぎりその行為にかかるコストを最小化しようとする。その結果が直線である。直線は、目的が達成されることではじめて価値を獲得する。もしも目的が達成されないならば、直線は無駄である。これが手段的価値である。
第２の価値観は、行為を正当化する基準が、現状を維持する行為（静寂主義）か、それとも現状を変革する行為（活動主義）か、という対立項からなり、モダンの目的を正当化する価値は後者である。活動主義は、現状の枠を外に向かってつねに乗り越えることを正当化する基準である。
この２つから、モダンが期待した価値とは「真面目に、無駄なく、我慢して、大きく」生きることだったのである。つまり合理主義・効率主義・禁欲主義・拡大主義は「手段的活動主義」を構成する重要な要因なのである。

3）時間：成長神話
モダンは、社会変動が常態化した社会構造をもつ。そこでの共通の時間感覚は「昨日よりも今日は経済的に成長しているし、明日はもっと成長しているはずだ」という成長神話である。モダンの世界では、すべてが無限に成長する（経済的貧困からの離陸に成功＝幸福＝目標達成）はずだという、量的拡大が時間の流れ（過去・現在・未来）に相関するコンセプトが共有されている。したがって時間の経過は「未来志向」という価値の表現でもあり、時間経過は成長（経済的量の拡大）を測定する尺度でもある。

4）秩序：分化と統合のメカニズム
社会的な関係はどのように秩序づけられることがモダンらしいことなのか。その秩序のルールが「機能的分化と統合のメカニズム」である。これは、ある所与の目的を合理的に達成するためのメカニズムであり、社会システムの構成要素の機能的特化に着目して、その特化された機能を部分として全体に統合する仕組みである。この場合、特化された機能は自律的ではなく（欠落体としての機能）、全体への部分的貢献によってのみ生存可能である。したがって統合機能がシステム全体の調整・管理機能として不可欠であり、それが特化された機能の部分的貢献を制御する。たとえば、性差の役割分化システム（男は外で、女は内）は、モダンのメカニズムの原点であり、核家族と組織の関係はモダンの社会システムを構成する基本パターンである。つまり機能的分化と統合の秩序原理は、貧しい（＝機能的に特化するしかない）主体を効率的に関係づけることで社会の目的達成度を最大化する最適な方法である。

5）権力：階層的な意思決定
モダンの社会秩序を実行可能にするには権力機構が不可欠である。それは能力主義に立脚した階層的な意思決定機構である。機能関係はその基本的な性質において非対称的なので、そこにはなんらかの権力関係が隠されている。たとえば、男女の性差は役割分化であると同時に、「男は女よりも偉い」という権力関係でもある。とすると、社会の目的達成との関連で分化した機能的関係は、同時に「意思決定する力（能力と権利）をもつ主体」と「もたない主体」との階層性になり、その権力関係が社会秩序の実行化をもたらすのである。ビューロクラシーはこの典型である。

パーソンズとモダンのリアリティ

３．パーソニアンのリアリティ（2）

6-技術：機械化のテクノロジー
社会システムを構成するのは、秩序（社会）と権力（政治）そして技術（経済）である。モダンの技術とは機械化である。マシーン・テクノロジーの進展がモダンの目的達成の手段として不可欠であった。そればかりか、「分化と統合」の秩序も機械のメタファである。機械のように社会システムを形成することがモダンらしいことなのである。それほどまでに、モダンの目的達成の手段には、機械化が不可欠であり、その拡張としての組織化（人の機械化）と産業化（工業化；機械化と組織化）が望まれたのである。モダンの社会は、物の生産にあっても、人間関係の制御にあっても、すべて機械のようにシステム化されなければならなかった。そうすれば、経済的な貧困からの離陸は可能だった。機械化は、組織化と産業化にまで拡張されることで、経済的成長を推進する先頭にたったのである。この意味で、モダンとは産業社会そのものである。

7-主体：アイデンティティ
モダンは、近代的自我という個人を基礎単位として形成される。その個人は、自分らしい欲求充足（目的）を求めて、自由な意思決定力（権力と権利）を発揮する主体であり、外部環境からの影響力に左右されることのない自律的な主体である。その自律的な自己こそがアイデンティティが確立された主体であり、強い自我である。モダンを支える主体のコンセプトはこの強い自我にあり、かれは自分らしい欲求充足へのこだわりを前提にして社会システムの形成を志向する。その場合、この主体は、欲求充足のために他者との関係を手段化し、しかもどこまでも強い意思決定の力を、利害関係（ゲーム）にあってもまた役割関係（ロールプレイ）にあっても発揮しようとする強い主体である。

8-思考：論理実証主義的思考
アイデンティティにこだわるモダンマンにとって、その思考様式は合理的でなければならず、その典型として論理実証主義思考がすべての思考パターンのなかで最高の地位を獲得した。その結果、論理整合性と経験妥当性の基準によって世界を認識し分析し総合する思考がもっとも重視され、感覚的で情緒的な思考パターンは芸術という特殊領域に封鎖され、宗教ように全体的で直感的な思考はもっとも非科学な思考であるとレッテルがはられ、知識体系のなかで最低の地位に位置づけられることになった。このように、科学的＝論理実証主義的であることはモダンマンにとって自明の思考パターンであり、したがってその思考を体得しえない場合には、アイデンティティの確立もまた不可能とされた。

9-行動：成果のリアリティ
モダンマンは、情報（言葉）よりも行動を重視する。「何を言う」ではなく、「何をした」かがモダンマンの証明として重要である。モダンマンとしての存在のリアリティは、いかなる場合でも行動によってえられる。つまり行動が真の基準であり、情報はその行動との一致の程度によって真偽の評価がなされる。たとえば言行不一致の場合、真は行動にあり、その行動に一致しない情報（言）はどこまでも偽である。
しかもその行動はそのプロセスに価値はなく、行動の成果が問題である。「何をした」が問題であり、「何をしているのか」はなんら価値をもたない。行動の結果が目的をどの程度達成したかによって、行動の成果が評価される。その評価がリアリティを生む。

10-所有：所有のリアリティ

モダンの究極のリアリティは「（近代的）所有」にある。とくに貨幣という一般的メディアに集約される社会財を所有すること、しかもその量を可能なかぎり多く所有することがモダンマンのリアリティである。それがモダンに生きる個人のアイデンティティ（成功者）であり、かつモダンの社会システムを産業社会を中核にして構造化する根拠である。

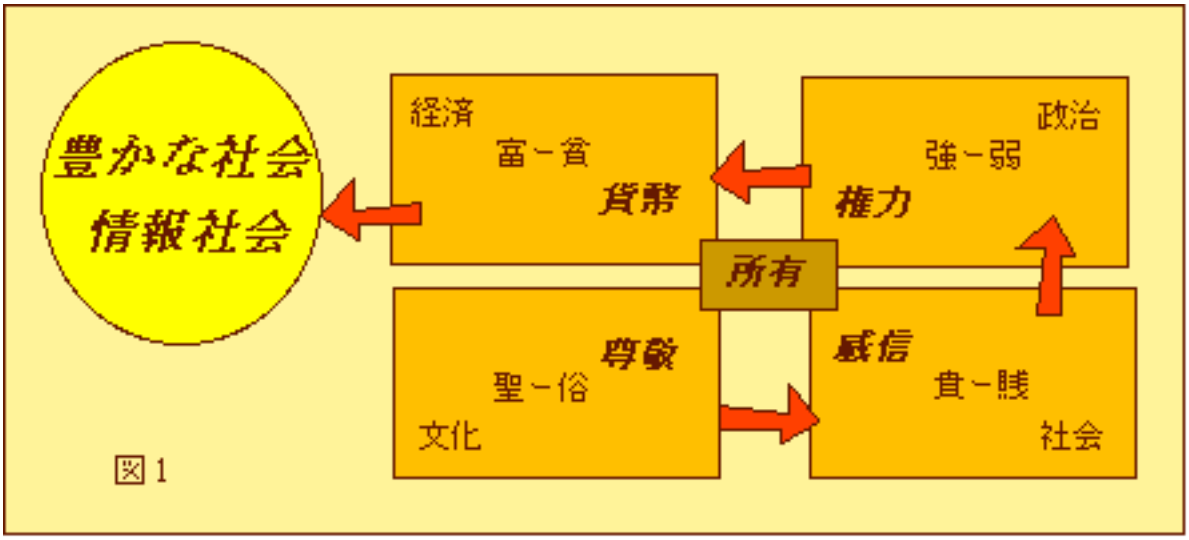


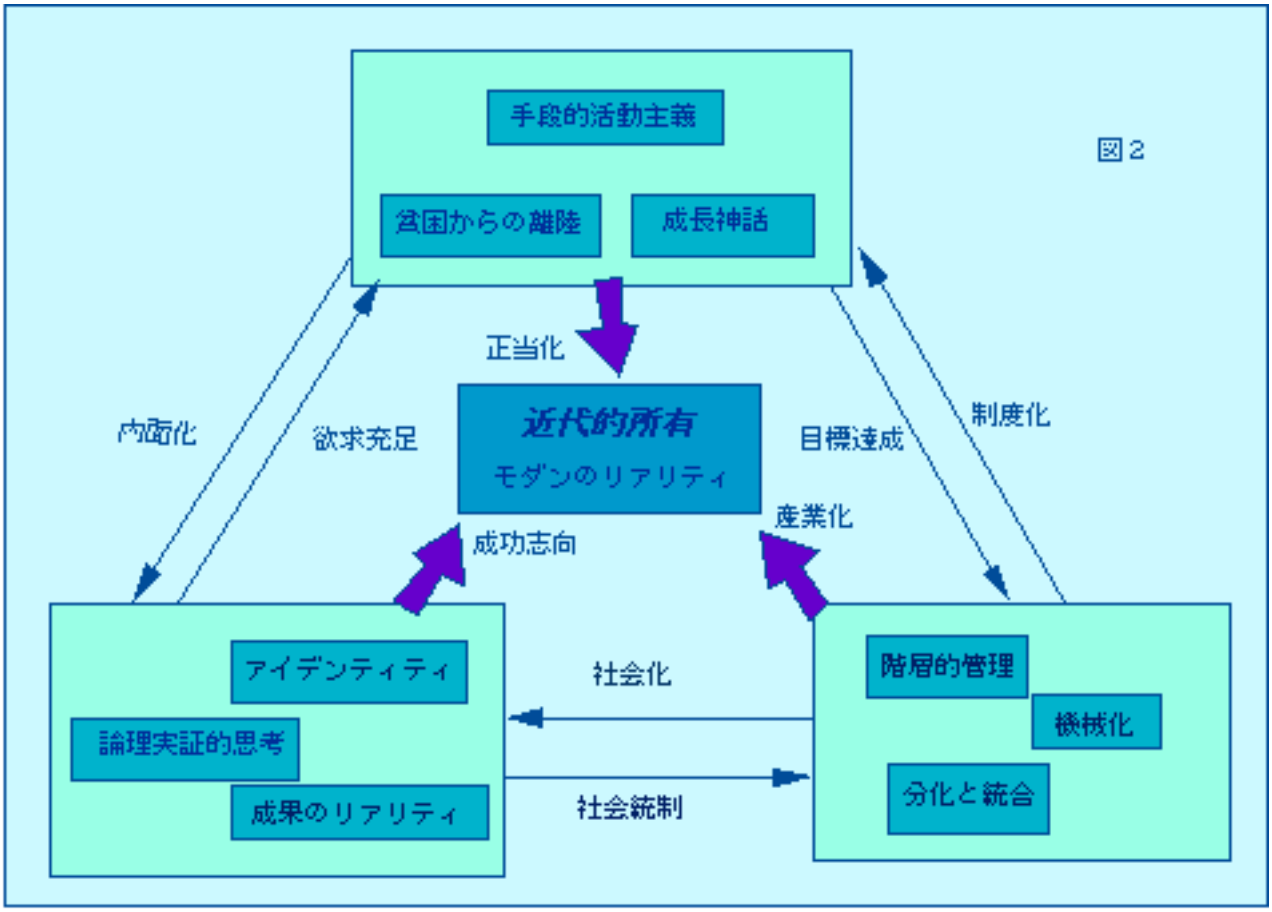
図1

パーソンズとモダンのリアリティ

３．パーソニアンのリアリティ（3）

もちろん所有そのものの歴史は、なにも近代社会に固有のものではない。ものを所有する歴史は有史以来のことであり、それは４つの一般的メディア（貨幣・権力・威信・尊敬）の正当性をめぐる歴史である。つまりある時代にあって所有を正当化する根拠となる一般的メディアが何であるかによって、その時代は４つの所有をめぐる歴史を生成したのである。図１に示すように、近代産業社会では、貨幣が所有の正当性を付与する最高のメディアであるからこそ、「富と貧」の社会カテゴリーがもっとも優先され、そこでは富者が時代を所有する地位を獲得したのである。それが近代産業社会である。それ以前は権力メディアを所有する者が「強者」の地位をえて、時代をリードしたし、それ以前は威信（社会的影響力）メディアの所有の有無によって「貴と賤」のカテゴリーが時代を特性づけ、さらにその前には尊敬（価値コミットメント）メディアの所有の有無によって「聖と俗」の時代があった。つまり所有の歴史は、聖者から始まって、貴者そして強者に変化し、さらに産業革命を契機にして富者が時代の所有者の地位を獲得したのである。モダンは所有の歴史の最後の位相にある。

以上１０のコンセプトは、図２のように関連している。簡単に説明しよう。



中心は近代的所有にある。これこそがモダンのリアリティの根源である。そこに向けて、３つの（行為）システムが構成された。それが近代的所有を「正当化」するシンボル（文化）システムであり、「産業化」によって近代的所有の社会を実現する社会システムであり、「成功志向」の動機づけによって近代的所有の獲得をめざした個人（パーソナリティ）システムである。

シンボルシステムは、価値と時間と目的から構成される。モダンとは何であるべきか、を明示するのが「手段的活動主義」の価値であり、それを時間に変換した場合が「成長神話」であり、そしてより具体的な目的に特定化した場合が「貧困からの離陸」である。つまりモダンのリアリティをシンボルとして表現するのは「もう貧乏は嫌だ。だからもっと真面目に、無駄なく、我慢して、大きく生きよう。そうすれば、きっと明日は輝いているはずだ」という神話を共有することだった。

パーソンズとモダンのリアリティ

３．パーソニアンのリアリティ（4

社会システムは、この神話を社会的な関係のなかで実現する仕組みを構造化することであった。その構造化を可能にしたのが、秩序（社会）と権力（政治）と技術（経済）である。つまりここでは機械をメタファとして社会的な関係を構造化することが期待された。技術としての「マシーンテクノロジー」の導入ばかりでなく、秩序（水平的関係）の方法としての「分化と統合」メカニズムと意思決定原理（垂直的関係）としての「階層的な権力」によって、手段と技術の問題ばかりでなく、人間関係にかんしても、機械のように分化し統合する合理的で効率的な社会システムが期待されたのである。個人システムは、この神話を個人の欲求充足との関連で実現する仕組みを構造化することであった。その構造化を可能にしたのが、自律性の確立をテーマにした主体と思考と行動である。つまり主体的な意思決定が利害関係にあってもまた役割関係にあっても発揮できる「能力（意思決定力）と役割期待（意思決定権）」を、いかに実現するかがここでのテーマであった。そのためには、個人は「自分とはなにか」というアイデンティティにこだわらざるをえなかったし、しかもそのこだわりは、論理実証的な思考方法を体得し、かつその方法を使用した合理的な目的達成行動によって、意味をもちえたのである。

さらに、その３つのシステムは相互に補完し依存する関係にあり、そこではつぎのような関係が確定していた。まず文化と個人との関係では、文化は個人にモダンの価値規範を内面化させることを求め、個人はその内面化された動機に基づいて行動し、それによって文化の価値規範を遵守することが期待された。その場合、価値規範の遵守が自己の欲求を充足させる、という関係が重要であった。ここでは、価値と欲求が矛盾しない関係を維持することがテーマであった。

つぎに、文化と社会の関係では、文化はその価値規範を社会システムのなかに制度として定着させることを求め、社会は制度化された価値規範を現実の社会関係の中で実現することで社会システムの目標を達成した。その場合、価値規範の遵守が社会の制度の仕組み（秩序・権力・技術）のもとで目的達成をもたらすという、価値と制度の矛盾のない関係の維持がここでのテーマであった。

そして個人と社会との関係では、個人の欲求充足行動を社会システムの役割期待に適合させるように、社会化（欲求を役割期待に誘導するための学習）のメカニズムが作動することが求められ、反対に、社会は個人の欲求充足行動が役割期待から逸脱しないように、報酬と罰（アメとムチ）のサンクションによって個人を社会統制するメカニズムが求められた。この２つのメカニズムは「選択（少数の選ばれた主体だけが自律する成功者であり、かつ社会からの権力・威信・尊敬を占有する）への合意」を前提として成立した。この前提をめぐって欲求と制度の矛盾のない関係を維持することがここでのテーマであった。

このようにして、近代的所有をめぐって、シンボルシステムからの正当化の付与と、社会システムからの産業化の実現と、個人システムからの成功志向へのこだわりによって、さらにそれらの相互補完と相互依存する関係によって、モダンのリアリティは実現されたのである。価値（正当化）と制度（産業化）と欲求（成功志向）の矛盾のない関係が「近代的所有こそがモダンのリアリティである」というコンセプトを支えたのである。

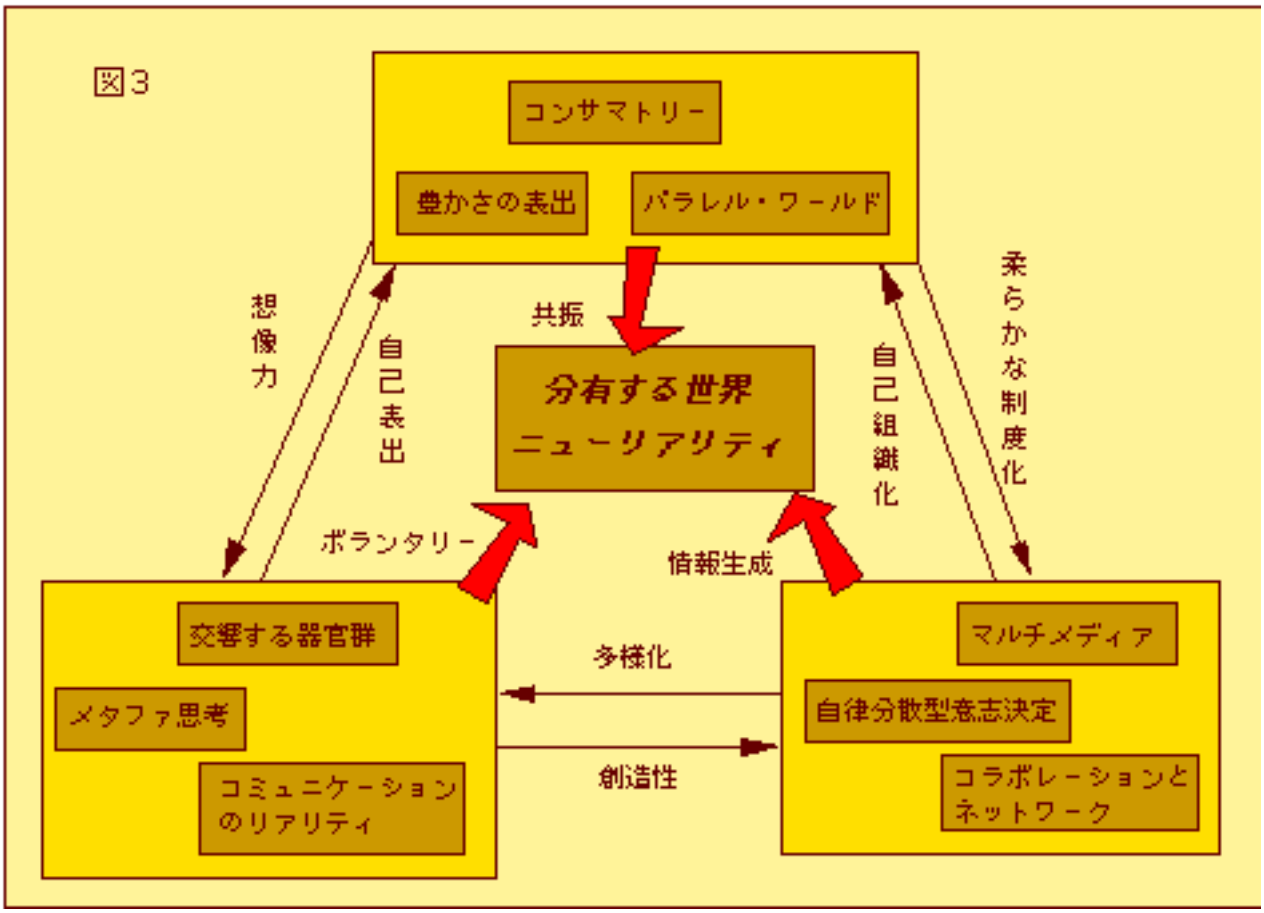
パーソンズとモダンのリアリティ

４．社会学的想像力　ver.3（1）

パーソンズが描いたモダンのフレームは、上記のようなものであったろう。それは、「近代産業社会とは何か」にたいして、パーソンズが提示した明確な回答であった。
パーソンズの悲劇は、その回答がでた７０年代に、モダンの社会がアメリカ社会ではすでに過去のシステムとして、価値としても制度としてもまた欲求としても、否定される方向性に確実に進行していったことである。

モダンの終焉はパーソンズのフレームそれ自体に内在していた。パーソンズは、モダンがその発展によって自生的に崩壊する社会システムであることを知ったうえで、にもかかわらずモダンの総合理論にこだわったとはいえないだろうか。モダンの目的が完全に達成されるとき、それはモダンのシステム全体の変動を余儀なくさせる。無限の目的達成の論理は、貧困からの離陸がまだ低空飛行の段階では、十分に納得できる論理であったが、豊かな段階（５０年代のアメリカ）に入ると、それはモダンのトリックでしかないことは暗黙の前提であったはずである。にもかかわらず、この歴史的な段階を理論化することが、パーソンズにとっては“最後のモダニストの巨人”としての使命だったのである。

では、パーソンズのフレームがもつモダンのリアリティはどのようにして喪失されるのであろうか。１０のモダンのコンセプトは新しい時代状況のなかでその不動の地位を脅かされ、新しいコンセプトにその地位を譲るとしたら、その移譲のパターンは何なのだろうか。想定される新しいコンセプトを図式的に示そう。（図３）



Ａ．シンボル・システムの変化

まずは、「貧困からの離陸」というモダンの社会目的が達成される。そこで登場する豊かな社会は、目的の変更を迫る。「経済的に豊かになっても、それは豊かさの『獲得』にすぎず、どのように豊かさを表現すればよいのか、わからない」というように、『豊かさの表出』こそが新しい社会のテーマになる。さらに、これは目的を正当化する価値の変更をもたらす。つまり『コンサマトリー価値』へのシフトが期待され、「楽しく、ゆとりをもって、今を大切に、そしてほとほどに生きる」ことが価値をもつようになる。とすれば、成長神話の時間感覚も崩れ、「いま＝永遠」といったような新しい時間感覚、過去と現在と未来が一直線で並ぶのではなく、多様な時間が並列する『パラレル・ワールド』の時間感覚にシフトする。その結果、シンボル・システムは「所有こそがモダンの究極のリアリティだ」を正当化するシンボルではなくなる。このシステムは、新しい社会のリアリティを求めるシンボルとなる。そのリアリティは『分有する世界』にある。

パーソンズとモダンのリアリティ

４．社会学的想像力　ver.3（2）

Ｂ．社会システムの変化
シンボル・システムの変化は新しい社会システムに「柔らかな制度化」を期待する。そこでは機械のメタファは捨てられ、コンピュータのメタファによる構造化が期待される。ここでのメタファとしてのコンピュータはもはや情報処理機械ではなく、情報生成（創造）メディアであり、コミュニケーションのテクノロジーである。このような意味をもつ『コンピュータ・テクノロジー』が技術・産業・生活・都市の社会基盤（コンピュータ・プラットフォーム）を構成する。これが機械化から情報化への変化であり、ここでやっと、情報社会が豊かな社会のシンボル・システムに共鳴し融合するかたちで登場する。

とすると、人間関係の秩序化も、かつてのような機能特化による「分化と統合」のシステム化ではなく、「融合と共振」によるシステム化へと変化する。これは、豊かな主体が多様でしかも柔らかな形で社会的な関係をつける方法であり、『コラボレーションとネットワーク』による秩序化ともいえよう。新しい人間関係は、機械＝分業のイメージ（硬い枠と強い絆）による目的達成志向的ではなく、コンピュータ＝コラボレーションのイメージ（曖昧な枠と柔かな絆）による創造的でコンサマトリー志向の秩序を求める。意思決定の方法も、ビュロクラシーに典型的な階層的な権力機構ではなく、『自律＝分散型』の意思決定メカニズムが期待される。秩序の原理がコラボレーションとネットワークになれば、すべての主体を階層的に統一する強力な権力機構は無用なので、それぞれの主体が分散してかつ自律した意思決定する柔らかな管理＝調整システムにならざるをえない。その自律＝分散型の調整メカニズムこそ、創造的な社会秩序を維持するために重要な方法である。

このようなコンピュータをメタファとして成立する社会システム（情報社会）は、モダンのリアリティ＝近代的所有とは矛盾する。情報社会とは、所有ではなく『分有』にこそ新しい究極のリアリティを求める社会である。とくに「コピー」のコンセプトは、新しい社会システムと『分有する世界』をリンクさせ、かつ豊かな社会のシンボル・システムを実現させる重要なコンセプトである。コピーは、「所有の世界（良いものは希少だ！）では偽物」だが、「分有する世界（良いものはたくさんある！）では、分有それ自体を維持し増幅させるメディア」である。それは新しい社会を想像するトリガーである。

Ｃ．個人システムの変化
個人のシステムにかんしても、豊かさの獲得という一元的な評価基準が無効になり、豊かさの表出という多元的なテーマが優先されると、成功志向は意味を失ってしまう。とすると、それを支えたアイデンティティも「なんのためなのか」という疑問に答えることができず、崩壊しはじめる。しかも新しいマルチメディア環境の登場で、アイデンティティと不可分の関係にあった「視覚＝活字メディア」の優先性が揺らぎ、新しい個人のコンセプトが期待されるようになる。これを「交響する器官群」と呼びたい。

この新しい主体のイメージは、もはや論理実証主義的な思考方法だけに固執することはない。かれらはもっと柔軟で多様な思考をもつ。そこでは、マルチメディアの影響が強く、視覚＝活字メディアと聴覚＝音響メディアと皮膚感覚＝映像メディアが主体の中で対等な関係でネットワーク化され、それによる思考が自由にかつ多様に発想される。したがって、理解・知識の評価基準も論理的であると同時に感覚的で、経験的であると同時に想像的でもあるといった、多様で包括的な思考が期待される。それをここでは「メタファ思考」と呼びたい。これは、合理的思考のもつ目的論的で縮約的な発想ではなく、拡散的で多様化の発想を重視し、つねに新しい価値の世界を自由に想像し創造することを求める思考方法である。このような思考方法は、行動＝成果という制約だらけの現実にリアリティを求めようとはしない。ここでは情報＝コミュニケーションにこそリアリティがあって、ある意味では行動＝成果は情報＝コミュニケーションのリアリティの残滓にすぎない。想像力や自由な発想がリアリティをもつのはまずは情報＝コミュニケーション・レベルであり、だからこそ情報が真偽の基準となり、コミュニケーションが行動を評価する基準になる。

このような個人のシステムは、すでに所有にリアリティを求めない。豊かさと情報化の恩恵を受けた個人は、新しい世界にリアリティを求める。それが『分有する世界』である。この世界は、経済的な世界からはもっとも遠い、ボランタリー活動のコミュニティに通じるような世界である。

Ｄ．システムとニューリアリティ
このように、パーソンズのシンボルと社会と個人のシステムからなるモダンのフレームのなかには、すでに変動の契機がビルトインされていた。豊かな社会と情報社会は、５０年代の大衆社会・消費社会・マスメディアの時代から始まり、７０年代になって高度化しかつ成熟し、そして現在にいたった。いま、その２つの社会が融合してまったく新しい社会の到来を予告する段階にいたり、モダンのコンセプトをことごとく否定する方向性が暗示されている。それがモダンのリアリティを喪失させるのである。

豊かな社会と情報社会は、それがクロスするとき、『分有する世界こそが、新しいリアリティである』という、近代的所有にかわって、そしていままでの歴史の根幹であった所有のコンセプトを超えた新しい世界の生成を予感させる。

パーソンズとモダンのリアリティ

５．パーソンズの死

誰がパーソンズを殺したのか。それは、モダンのリアリティである。パーソンズの機能主義理論はモダンを語るうえで最高の道具であった。コントからはじまった近代産業社会の新しい時代のイメージを、そしてウェーバー・ジンメル・デュルケームが行為と関係と制度の視点から明確にしてきたモダンのパーツを、パーソンズは、さらに経済学や心理学や精神分析など他領域のモダンのパーツをすべて包括して、壮大な社会学の総合理論を構築していった。その業績は２０世紀そのものを代表する社会学者にふさわしいものであった。２０世紀はモダンの輝かしい集大成の時代であり、それはパーソンズが構築してきた機能的な世界そのものである。パーソンズがはたした役割を考えると、ウェーバーやデュルケーム以上の、あるいは少なくとも同の同程度の評価があってもおかしくはない。にもかかわらず、今という時代は、遠い過去には優しいが、身近な過去には冷たい。パーソニアンでさえ、冷笑的な態度をとっていさえすれば、他からの視線に耐えられるかのような気でいる。

そうではないのだ。パーソンズは、モダンの最後をみとって、自らもそれに殉じたのである。パーソンズは、コント以来のモダンを語ってきたすべての社会学の伝統に決着をつけ、そしてそこに含まれるすべての社会学者、もちろんウェーバーもデュルケームも含んで、かれらに「モダンのリアリティとはこれだ」と機能主義の成果を誇示した。それは「モダンは、もう終りだ。目的はもう達成された。」と宣言したことと同じである。だからこのかぎりでは、パーソンズの死はウェーバーやデュルケームの死でもある。それほどパーソンズの死の意味は大きい。

豊かな社会と情報社会は、モダンのリアリティを喪失させ、そしてパーソンズを死に追い込んだ。しかしつぎのリアリティの模索がはじまったばかりで、新しい社会のヴィジョンはいまだ明確に描かれていないし、共有されてもいない。豊かさと情報の問題は、どのような社会であるべきなのか、どうあってほしいのか、たとえそこでのヴィジョンが合意されても、それを実現するための制度や政策そして戦略はどうすればよいのか。もちろんその萌芽は、５０年代のアメリカに始まり、７０年代の成熟期を経て、９０年代を迎えている。しかし本格的な展開はこれからである。ひとつは、コンピュータをメタファとした『分有する世界』をいかにイメージできるか。もうひとつは、豊かさにかんしても、見栄（権力）＝消費のゲームではなく、ゲームを超えたなにか、たとえばボランタリー活動のコミュニティのような『分有する世界』をいかにイメージできるか。２１世紀に向けて、やっと世界が大きく動きだした。そして、２０世紀の巨人タルコット・パーソンズは今やっとその歴史的使命を終えようとしている。